

「名も無き女の碑」



(裏面) 今次の大戦に脆弱の身よく戦野に挺身 極寒暑熱の大陸の奥に又遠く食無き南海の孤島に戦塵艱苦の将兵を慰勞激励す 時に疫病に苦しみ敵弾に倒る 戦い破れて山河なく骨を異国に埋むも人之を知らず 戦史の陰に埋る 嗚呼 此の名も無き女性の為小碑を建て 霊を慰む

昭和四十八年十月建立
東京 井谷 忠衛

鴨川市花房の慈恩寺には、「名も無き女の碑」と刻まれた鎮魂碑が建っています。かにた婦人の村の城田すず子さんの告白により 1985年に建てられた「噫従軍慰安婦」の碑より 12年も早い 1973年のことでした。

花房製菓(鴨川市)の先代社長・刈込善一さんと東京の井谷忠衛さんが建てたものです。戦後の洋菓子作りで出会った二人は、ともに衛生兵として「従軍慰安婦」に関わる業務についていたため、「かわいそうな女性たちがいたよね。彼女たちを弔ってあげたいね」と共感しました。東京では建てる場所が見つからず、鴨川でも二転三転した末、ようやく無住の慈恩寺に建てることができました。しかし、地元には反対する声もあったため、碑には刈込さんの名前は出さずに、井谷さんの名前だけを刻むことになりました。

刈込さんは、満州事変・日中戦争・アジア太平洋戦争に衛生伍長として従軍しました。1944年9月にアンガウル島からパラオに傷病兵を搬送する任務中に、潜水艦の攻撃を受け、船は沈没しましたが、奇跡的に刈込さんは九死に一生を得ました。その間に、アンガウル島の部隊は全滅し、唯一の生還者となったのです。

1945年12月に復員し、継いだ家業の和菓子屋を洋菓子屋に切り替えようと考へ、東京の井谷さんに指導を受けることとなったのが、二人の出会いでした。偶然二人とも衛生兵で、パラオに配置されていたことが分かり意気投合したことから、慰霊碑の建立に至ったのです。

刈込さんは、1983年に69歳で亡くなりました。よく話を聞いていたという妻の富美代さんが意志を継いで、この碑を守ってきました。私たちは刈込さん本人と面識がなかったものの、富美代さんをご自分のことのように明快にご教示くださいました。

さらに刈込さんは、仲間の遺骨を収集するために、戦後何度か個人でアンガウル島を訪問し、現地に慰霊碑を建てたとのこと。その碑を守ってもらえるよう島の酋長に依頼し、亡くなるまで供養費を送り続けたそうです。

その富美代さんも2013年に亡くなられましたが、今は檀家の女性たちがご夫婦の遺志を継いで、「名も無き女の碑」をまもり、平和を祈りながら女性たちの霊を慰めています。

NPO 法人安房文化遺産フォーラム 池田恵美子

【参考】「大東亜戦没日韓看護婦 慰霊の碑」

～ 野崎の「慰安婦」の碑 ～

大阪府大東市野崎にある「大東亜戦没日韓看護婦 慰霊の碑」には、「いくさ人 いたわり助け 育みし看護の労いを 永遠に称えぬ」という言葉が刻まれています。資料によると、建立は1977年、施主は石田龍雲、協賛者芳名として3人の韓国人と3人の日本人があるようです。これだけでは、慰安婦のことがどうか分かりませんが、裏面に刻まれた日韓の人数からみると、看護婦とは考えられず、密かに慰安婦を弔ったものであろうと理解されています。今なお、心ある人びとによって大事に供養されています。



(裏面) 大東亜戦争三十三回忌を迎えて、この碑は大東亜戦没朝鮮処女 女子挺身隊七万余人、日本看護婦二万余人、計九万余人の尊き英霊を祭るために建立す。心ある人々の参拝を心を覃めて願う。